

日銀神戸

## 支店長の視点

別所昌樹氏



朝来市の生野銀山に行ってきた。兵庫でお金の仕事をやるからには一度は行かねばと前から思っていました。坑道を見て、名物のハヤシライスを堪能する週末でした。

生野銀山での銀採掘は、16世紀末から17世紀前半が盛期でした。当時の生野では、掘った鉱石の大部分は鉱脈を探す山師と実際に掘る鉱夫とで山分けされました。この仕組み、計算作業を行って報酬を得るビットコインなどの暗号資産と似ている気がします。暗号資産の世界でそうした作業を「マイニング（採掘）」と呼ぶのも納得です。

銀は当時、西日本を中心にお金として使われていました。ビットコインも、発明者サトシ・ナカモトはお金として使われることを意図してい

## 生野銀山と暗号資産

ました。この二つ、お金としての信認の淵源を希少性に求める点で共通しています。銀貨は素材の希少性、ビットコインは発行上限をプログラムで厳格に管理する希少性です。

しかし今日、銀はお金の価値を裏付けるものではありません。ビットコインも、投資資産としての地位は確立しましたが、財やサービスの対価の支払いに使うことはまれです。なぜか。お金は、世の中の取引の決済などに必要な量が柔軟に供給されることが大事だからです。江戸時代は、藩札がそうした役割を担いました。今日では、中央銀行による通貨発行と民間金融機関の信用創造がそれを実現しています。

ところで、日銀では、暗号資産の基盤技術であるブロックチェーン上で市場参加者向けに預金を発行する実験を始めました。これは、取引を自動的に処理しやすいといったブロックチェーンの強みと、柔軟にお金を供給できる仕組みを融合させる試みです。